高田留奈子先生講話「一粒の麦として」

2008年7月27日 東京・カトリック松原教会

今日は皆様、このお暑い中を全国各地からいらして下さいまして、本当に有難うございました。

実は私、^{注1}今年の1月に仙台の元寺小路の教会にお招きいただきまして、夫の典礼聖歌についてお話ししました。本当に光栄なことで、これは一生一回の恵まれたチャンスだと思っておりました。そして、一所懸命お話ししまして、もうこれで終わりかと思いましたが、また今日も呼んでいただいたので、嬉しいような...でも、あの時お話ししたことは、^{注2}また、“やまびこ”さん(岡谷・やまびこ男声合唱団)がたくさんいらしていますから、同じことをお話しできない...と思って少々困ってまいります。

でも、今日は2日間の合宿ではございませんし、出来るだけご指導のほうに時間をとりたいと思いますので、主なことだけ、ということでダブル話もありますけれど、なるべく別の話を、と思っております。

この前は、夫が、どうして典礼聖歌を作曲するようになったかというところからお話ししたのでございますが、合唱をやっていらっしゃる方達、夫の「水のいのち」とか「心の四季」とかいろいろ歌って下さっている方も多と思いますので、まず、夫が大学を卒業する頃に、どういう意図で作曲をしよう、何のためにしようか、という風に考えてそれを自分で手記として本に残しておりますので、それについてちょっとお話ししたいと思います。

^{注3}『日本の人たちのために、私は私の一生を使おう。日本には日本の音楽史があるべきであり、また、私には私の音楽史があるべきなのだ。世界の音楽の先端がどこへ向かっていようと、私は私自身の仕事をし続けよう。』これは「来し方」という彼の随想集に、これはちょうど、今の芸大、旧東京音楽学校の研究科を出る頃の、いよいよ作曲家としてデビューしていく時の決心なのでございますが、その為に夫は、雅楽とか仏教の音楽、謡曲、それから長唄とかお琴、民謡、いろいろなものを作曲の勉強の傍ら自分で勉強するために、いろいろ聴きに行ったり、テープを取り寄せたりしておりました。最晩年になりましてからでも、平家琵琶に興味をもちまして、NHKのそのテープのセットになって売っておりましたのを買ってありましたけれど、1巻を聴いたくらいでもう、命のほうに先に消えてしましまして、そのテープはそのまま残っておりますが...そのように一生、日本の音楽をまず大事にして、その中にはいっている日本の精神、日本の心は何か、それを自分は作曲で表していきたい、そういう覚悟で彼は作曲家としてデビューした訳でございます。

それがまた、はからずも“典礼聖歌の作曲”というご大役をうけた時に、夫は、カトリックの教会音楽の中で最も古く歴史に残っておりますグレゴリオ聖歌と、日本の伝統音楽とを溶かしあわせて、別に、混ぜるのではなくて、両方のその特徴を自分の中で溶かして、自分独特の旋法で教会音楽を書きたい、と決心したようでございます。と申しますのは、この前の時にもちょっと申しましたけれど、^{注4}第2バチカン公会議の前は、カトリック教会の典礼は全部ラテン語、どこの国に行ってもラテン語のミサでございました。それが、この公会議によって各国語で、その国民のことばで祈ってもよいという事になりまして、日本ではまず、ことばの翻訳が先になったのでございますが、その音楽担当として日本の司教団から、そういう(作曲の)命令をいただいた訳でございます。

その時に、今お歌い下さった「神を求めよ」は、預言者イザヤのことばですが、そのイザヤという人は、^{注5}神様から召しだされ「誰か私のことばを伝える人はいないか?」と神が言われた時に、「私がここにおります」と言って自ら進んでそのことばをお受けして、そして神様は炭火をもって彼のくちびるを清めて、本当に神のことばだけを語れるような人に変えて下さった。それと同じよ

うに日本の司教団からそのご命令をいただきました時に、これは本当に神様から名指して「お前がやれ」と言われたという直感を持ちまして「自分は本当に相応しくないかも知れないけれども、一生をこれに捧げよう」と固く決意したのでした。それから、多分このお仕事をしていた^{注6}期間は20年ぐらいと思いますが、そのあとも、今日あとで歌って下さると思いますけれど、「神のみわざがこの人に」という最後の曲、あれは86歳の時でございましたが、ずっと亡くなる直前まで書き続けていた訳でございます。

そして今でこそこのようにどこの教会でも“典礼聖歌集”というのが備えられておりまして、もうこのごろは皆さんこれを歌うのはあたりまえ、むしろ習慣的、反射的に歌っているという風な感じが多いのですけれども、これが始めて歌われた時は、それまでは「カトリック聖歌集」という非常に甘く美しいメロディー、ことに外国の賛美歌に日本の歌詞をあてはめたようなものが多かったのですけれども、今度は詩編のことば。詩編のことばは神のことばですから、それに相応しい曲を作るという事に夫は本当に一所懸命になりまして、ただ自分の作曲の才能とか、自分の趣味とか、ただことばが合っていると、いいメロディーだというのでは神様のご意志は伝えられない、本当に神様が何をお望みになって、この詩編でどう言いたいのかという事、それが曲になるようにと、音をひとつひとつ選んで、祈って...ある神父様が家にいらした時に、「^{注7}観想修道会の修道者よりも厳しい生活をしている。」と仰しゃったほど、これをお受けしている間は、まったくこれに集中しておりました。そして初めて出来た曲の中のひとつが“谷川”だったと思います。これは典礼聖歌の中でも傑作と今でもいわれている曲でございますけれども、こういう曲が出た時に一般の反響というのは賛否両論と申しますか...否の方が多かったのです。まあ、こんな分かりにくい、難しい、メロディーとしても、今までは美しいメロディーの賛美歌を歌ってましたからね、つまらないとか退屈だとか、まるでお遍路さんの歌みたいだとか、色んなことを言われたのですけれども、そうした中でも、決して彼は自分の考えを曲げないで「神様の語られているご意志をどう表わそうか」ということだけを一所懸命やっておりました。

それともうひとつ、非常に困りましたのは、翻訳の段階で、司教団の方でも^{注8}翻訳のグループがお作りになった訳ですが、どんどん、ことばが変わるのですね。ですからそれが曲を作るためには全然合わないような事もありました。何度あったかわかりません。いま、ずっと考えておりますと、これは、いちばん、どうしても音楽にならない、と思うことばがひとつ思い出されたのです...それは御ミサのどこでそのことばがあったのか、ちょっと憶えていないのですけれど、『それはふさわしく正しいことです』というところがあったのですね。「これはどう考えても曲にならない」...そういうのがこれひとつではございませんでした。いっぱいありましたので、もう、司教団と本当に喧嘩するくらいの勢いで「これは出来ない、直せ!」とか「これで意味はあっているのだから、作れ!」とか、大変な時期もございました。

その中のひとつとして申し上げます。この前(仙台合宿)も申し上げたのですけれども...^{注9}「やまとのささげうた」というミサ曲を先に作ったのですけれども、それは「主 あわれみ給え」なのです。いまの^{注10}“第一ミサ”といわれているのは「主よあわれみ給え」になっていますね。そうすると神父さま達は、(やまとのささげうたの旋律で)「主よあわれみ給え」ではどうしてもよくないのか、と仰しゃる訳ですね。でも、同じ音の中に「よ」を一つ入れることさえも、夫は同意しませんでした。それで「主よ」の方はあとで「主よあわれみ給え」(第一ミサ=ミサ曲)というのを別に作った訳ですが、このことばにはどうしてもこの音」というのは、夫は拘りがあるものですから...そのことで彼はもう、かなり殉教の、と言ったらなんでしょうけれども、自分の良心に対しての、まあ、殉教の苦しみはかなり持ったと思います。

そして今度、^{注11}8月には九州でこの典礼聖歌の合宿とコンサートがおありになる訳ですが、しかもあの殉教の地、私もまいりましたけれども、色んな地獄、池の中につっこまれたり、逆さに

吊るされたりして、たくさん殉教された、その地でこういうコンサートが開かれる、夫にとって、こんなに素晴らしいことはないと思います。

夫は、洗礼を受けた時も生半可な気持ちではございませんでした。なった以上はもう、殉教するという覚悟でございましたから、そういう訳で、いま、皆さんがこうして歌って.... 2曲うかがただけでも、なんと皆さんが本当に心から真剣に響きを受けとめて、思いをこめていらっしゃるかということがよく分かりました。ですから、今日 17 時まで、また聴かせていただけるのは本当にすばらしい事だと思いますし、それがまた今度は、びわ湖ホールで 500 人近い合唱でこれが爆発したらもう、日本の国はひっくり返って、回心してくれるといいのですが... (一同大爆笑) 回心するかどうか分かりませんが、どうぞ皆さん、その時は日本の国をこれで、“神に立ちかえれ!” と怒鳴ってきてほしいと思いますね。そしたら皆さん、聴きにきた人も少しは考えてくれるかも知れませんね。

この仕事(典礼聖歌の作曲)は大変といえば大変でございましたけれども、やはり、神様は必ず、一所懸命やっている人には報いを下さいます。夫はこの仕事のおかげで、本当に深い信仰をいただきましたし、神様のみことばを非常によく深く理解することが出来たと思います。それで、さっき申しました始めの頃、この典礼聖歌の作曲をお受けした頃というのは、いま思いますとちょうど「水のいのち」を書いていた頃です。

それはまた、完成までに 8 年の歳月をかけて作曲した大作、^{注12}ソプラノ、バリトン、ナレーター、合唱と管弦楽のための宮澤賢治の詩による「無声慟哭」を書き終えたところでもあったのです。夫は随想集『くいなは飛ばずに』に「あの曲の制作以後、私は『これを書きながら死んでもよい』という作品しか書く気がなくなってしまった。」と書いてありますが、そのあと、この典礼聖歌の仕事がほとんど終わりかけた 1980 年代に、いわゆる^{注13}「聖書三部作」といわれている、「イザヤの預言」、「預言書による争いと平和」、「ヨハネによる福音」の 3 曲を書いています。みんな芸術性の高い大作ですが、これを書くことになった時に夫は、「この為にこそ自分は作曲の修練をして来たのではないか、これが自分の作曲家たる本当の目的だった。」と非常に深い確信を持ちました。男声合唱になっている曲もありますので、いつかまた皆さんにも歌っていただきたいと思います。これらの 3 曲は彼の生涯の遺言のような曲だと思っています。

そういう風にして夫は、このお仕事を 20 年続けて、そしてこの「合本」が出来たところで一応終わったのですが、そのあとで今後はお役目としてではなくて、自分の信仰告白とか、自分のいただいた恵みとか、聞いた説教とかそういうものを作詞、作曲して作った曲がいくつかございます。今日も歌って下さる「神のみわざがこの人に」もそうですが、その他にこの中(典礼聖歌読本)にも... 「来なさい 重荷を負うもの」というのもそうですし、あと色々ございます。それは、ここの敷地の中にある、オリエンズ宗教研究所というところから^{注14}『典礼聖歌・合本出版後から遺作まで』というタイトルで出ておまして、その中には、むしろ仕事として書いた曲よりも本当の自分の告白的なものが多いような気がいたします。もし、ご希望、ご関心がおありになりましたら、是非、歌っていただきたいと思います。

そして夫は 2000 年の 10 月に亡くなったのですけれども、それまではあまりにも自分で丈夫だと思すぎて過労を重ねまして、急性心不全になったのが 1995 年、ちょうど 5 年間、その時「ゆっくり静養して天寿を全うするか、したいだけの仕事をして早く命を終えるか.... それはあなたの決定にまかせる。」という主治医からの診断でございました。けれども夫は、もちろん後者を選んだのです。それから益々指導に行ったり、講演会に行ったりして... また、曲も^{注15}それからたくさん作りました。

いよいよ最期、2000 年の 10 月 13 日の夜、救急車に乗ったのですが、その前日に私を枕元に呼んで「一所懸命やって来たつもりだけれど、いま思うと俺は何もしなかったと思う。」と申しました。もうほとんど起きることも出来ないような状態でございましたけれども、それで私は、「それでもあ

なたの典礼聖歌を聞いて洗礼を受けた方もあるし、あちらの教会でもこちらの教会でもどんどん歌っているからいいのではないですか」と言いましたら、「そんなありふれた慰めごとを言うな」と厳しく叱りまして、本当にガツクリと頭(かしら)をたれて考えこんでおりました。そして次の日に救急車で運ばれて、それから9日後、10月の22日に亡くなったのです。

夫は、これだけの仕事を仕上げ、喜んで満足して死んだのではない。「まだまだ、俺は何もしなかった。」と言いましたけれど、それは、大きな神様が目の前にいらっしゃった境地になった時に、本当に自分の小ささ、無力さ、そういうものを全て非常に深く感じたのだと思います。

夫は死にましたけれど、曲は残りました。2002年、東海メールクワア-の都築会長がコンサートの後で、「典礼聖歌をもって日本列島を縦断する。」と仰しゃいました。すごい勢いだなと思いましたが、本当にそうになりましたね。北海道から沖縄まで、そしてこの典礼聖歌読本にも数が書いてあると思いますけれど、いま、男声の典礼聖歌を歌っていらっしゃる人数というのは素晴らしいし、今日の練習をうかがっただけでも、本当に胸にぐっと迫るようなすごい迫力と、魂に響くものを持っていらっしゃいます。これは一体なんだろうと私は思っておりますが、皆様、なんでこんなに典礼聖歌が気に入っていらっしゃるのだろうと、こちらから伺いたいくらいです。

考えてみますと、やはり、今、こういう世の中になって、昨今もいろんな、教育の畑まで不正があったり、人は誰でもいいから殺したかったりする、全く滅茶苦茶な世の中になってしまいましたが、その為に何が出来るかといったらやはり、どこか立ち帰るところ、自分がこれは正しいと思うところを持つことが何より大切なのではないかと思います。

そういう意味で皆さま、この戦後の日本の経済成長を支えてこられた皆さまが、こんどは日本の文化・精神を支える一番の中心になってこの歌を日本中で歌って下さったら、こんなに素晴らしいことはないと思います。

本当に日本の国が、夫が望んだように、神の国の来る、神の平和が支配する国になって、皆が愛しあうような、そんな国になるのも皆様のお力によって、もちろん皆様のお力だけではなくて、そこには神様のすばらしい、私どもの考えることもできないその愛と力がありますが、ひとりひとりがやろうと思うことさえすれば出来ることだと思います。

今日は東京地区ですが、次は九州で、神戸で京都で、それから諏訪地区でもなさると仰しゃっていますけれど、日本中にこういう集まりがひろがって、皆様が心から歌って下さったら、こんなに素晴らしいことはございません。夫にとりまして、彼がこの世に生を受けたその恵みが、一粒の麦が死んだ為にこそこれだけになった、その素晴らしさを皆さんがひとりひとり、今日のこの感動の中で、ご自分それぞれ感動されたことを.... 別に「クリスチャンになれ」と、夫はひとことも誰にも言いませんでした....

キリスト教とか、そういう小さなジャンルではなくて、自分を越えたより大きなもの、超越者、もう、偉大なもの、そういうものの力に皆さんがどんどん導かれて、また、それを広めていらしたら...本当に日本の国にとってもすばらしい事だと思います。

今日は皆様、ありがとうございました。どうぞこれからもよろしく願いいたします。

監修

高田留奈子

講話録音記録より書き起し

片山 和弘

(東海メールクワア-)

高田留奈子先生講話『一粒の麦として』 注釈

注1.(今年の1月)

1月12-13日、仙台・カトリック元寺小路教会において滋賀 JAMCA 関連、東北メンバーを主たる対象とした仙台典礼聖歌合宿が実施された。
留奈子先生の講話は2日目の最初のプログラムで、パート練習に先立って30分間行われた。

注2.(また、やまびこさんが)

やまびこ男声(岡谷)は、2007年5月(名古屋)に続いて指揮者、会長をはじめとした20名が、夜行長距離バス往復で参加という熱烈ぶりであった。

注3.(日本のひとたちのために)

「八重奏曲」を卒業作品として本科作曲部から研究科作曲部に進み、朝から晩まで作曲の事だけを考える日々の中で、一生の仕事となる作曲について、なぜ書くのか、何を書くのか、どう書くのか、遠い目標と目の道順を考え問題を絞りあげていった。そしてその決意は堅固な信念となり、生涯を通して見事に貫らぬかれたのである。思いつきで作曲しない。ひとつひとつの作品が次の作品の土台となっていくような心構えで、日本人であることの責任として、日本語のテキストを持った作品か、日本の旋律と関連ある作品を書いていく。日本の人たちのために、私は私の一生を使おう。

ところで、本科作曲部卒業作品「八重奏曲」は1939年7月、井口基成指揮によって放送初演(NHK)されたが、それは自分が意図したものからは遠く離れて不満だけが残る作品であった事から、後に他の何作品かと共に楽譜は破棄された。

注4.(第2バチカン公会議)1962-1965年

キリスト教信仰の伝統を現代社会の状況に即してよりよく伝えることの必要性を確認し、そのための自己改革を教会自身に促すために開かれた会議で、特に、典礼(ミサ)の重要性が強調されたところに当会議の特徴があった。

そして、今後の典礼のあり方についての決定を収めた『典礼憲章』が発表(1963年12月)された事により、カトリック教会の典礼国語化の道が本格的に開かれたのである。

(参考:2005年4月、西脇神父講習テキスト)

注5.(神様から召したされ)

旧約聖書・イザヤ書第6章「イザヤの召命」

注6.(期間は20年ぐらい)

典礼聖歌の作曲は38年間にわたり、亡くなる直前まで続けられた。ここで留奈子先生が話された20年ぐらい、というのは、多くの困難、辛酸をなめながら四面楚歌ともいべき状況の中で、強い信念と深い信仰に支えられながら作曲された、年間を通して行われるミサに必要、十分な200曲以上の聖歌が「典礼聖歌合本」にまとめられて発刊(1980年)されるまでを指している。

注7.(観想修道会)

カトリック教会に数ある修道会の一派。基本的に世俗とは隔絶した形、修道院の中だけで「祈り」と「観想」(一定の対象に向かい一意専心に想いをこらす)そして「労働」を中心とした生活を送っている。

つまり、毎日ミサと7つの時課の祈り(教会の祈り)、2時間の念禱(沈黙の祈り)が捧げられる。その他の時間には祈りのうちにそれぞれの生活のための仕事に従事する。

高田典礼聖歌と特に関係深い観想修道会としては、「教会の祈り」作曲の時に試唱協力を受けた北海道のトラピスト修道院(男子)。作曲された当初から高田聖歌を歌い続けていた味わい深い歌唱が高く評価され、高田三郎立会いのもと、「歌唱ミサやまとのささげうた」のCD収録が行われた京都カルメル会お告げの聖母修道院(女子)がある。

注8.(司教団翻訳グループ)

典礼聖歌編集部

注9.(やまとのささげうた)

1963年6月初演のミサ賛歌(ミサ通常文による)

「カトリック聖歌集改訂委員会」における改訂作業の最終段階で、日本語によるミサ曲一式を新しく作曲することになり委員の一人であった高田三郎が担当。

浄土宗のお経の旋律的、旋法的特徴をとり入れて作曲したもの。

注目すべきは、この日本語によるミサ賛歌の作曲が、典礼国語化の道を開いたとされる第2バチカン公会議での決定を収めた「典礼憲章」が発表(1963年12月)される以前の作業であった事だ。実は、フランス、ドイツを中心に、すでに19世紀から広がっていた典礼刷新の動きが日本にも及んでおり、「聖歌集改訂委員会」はその広がりの中にあつたのである。

「やまとのささげうた」は、そうした公会議以前の典礼運動の流れの中に誕生した、日本における典礼刷新運動のさきがけとなる記念碑的作品といえる。

(参考:2005年4月、西脇神父講習テキスト)

注10.(第一ミサ)

1969~1975年にかけて作曲されたミサ賛歌

この他に作曲者が異なる6種類のミサ賛歌があり、高田三郎を「ミサ曲」として以下ミサ曲2-7と区別。

更に「やまとのささげうた」を加えた8種のミサ賛歌がある。

注11.(8月、九州での合宿、コンサート)

九州地区を中心に全国から77名が参加して行われた。

8月9-10 熊本・カトリック島崎教会で合宿とコンサート。

8月11日 天草・カトリック大江教会、本渡教会でコンサート。

8月11日 天草・カトリック崎津教会で献歌。

注12.(ソプラノ、バリトン、ナレーター、合唱と管弦楽のための宮澤賢治の詩による無声慟哭)

日本フィルハーモニーの委嘱初演・1964年3月。

「面壁八年、最初の音符を書き始めてから完成までの実に8年間、“死”と向かい合ったいつ果てるとも知れぬ時間の連続であった。」と回想し、「作品は作家の結果である、という程度のなまやさしいものではなく、作家が作品の結果である。」と言い放つ程、作家の心を鍛え、その後の高田音楽の特質を決定づけた作品。

注 13. (聖書三部作)

聖書三部作は、「聖書が日本人に親しいものになるように」との願いのもとに作曲された。

イザヤの預言(1980年) 預言書による「争いと平和」(1983年) ヨハネによる福音(1985年)。原曲はすべて混声。テキストの内容から前衛的手法もかなり用いられている。須賀敬一編曲による男声版、がある。は3楽章、4楽章のみ作曲者編曲の男声楽譜あり。

注 14. (典礼聖歌・合本出版後から遺作まで)

オリエンズ宗教研究所が出版(2004年9月)。文字通り「典礼聖歌合本」出版(1980年)以降に作曲された12曲と高田留奈子作曲「ロザリオの珠」の計13曲を収載。いずれも原曲のみ。

- 曲目
1. 来なさい重荷を負うもの
 2. 母は立つ
 3. 神の前に貧しい人は
 4. 主は与え
 5. 平和の祈り
 6. 愛の賛歌
 7. 兄弟のように
 8. 行けモーセ
 9. 神のみわざがこの人に(遺作)
 10. お告げの祈り(口語訳)
 11. 主の祈り(口語訳)
 12. 主があなたを祝福し
 13. ロザリオの珠(野ばらのにおう)(田中滝子 詞 高田留奈子 曲)

なお、遺作「神のみわざがこの人に」は「主があなたを祝福し」(1992年)と併せてカワイ出版からも出ている。(2001年10月)

こちらの方は、2曲とも須賀敬一補筆(編曲)を加え、混声、女声、男声の3形態が収載されている。

注 15. (また、曲もそれからたくさん作りました)

1995年12月以降の作品

1. 渡辺直己短歌集 全12曲(男声・混声) 1996年
2. 青森の子守歌(混声) 1998年
3. 山形の子守歌(混声) 1998年
4. 女声合唱組曲 マリアの歌 全4曲 1999年
5. 福島の子守歌(混声) 2000年(遺作)
6. 神のみわざがこの人に(混声・女声) 2000年(遺作)
7. 管弦楽のための五つの民俗旋律(遺作)

原曲は、ドイツ・ミュンヘン国立音楽大学へピアノ留学(1969年~)した愛娘・江里のために、1曲ずつ出来上がるたびに書き送ったピアノ独奏曲。(全5曲・1978年初演)

最晩年期、オーケストラ編曲に取り組んだが、あと第5楽章の一部を残すところで最後の心臓発作に襲われ、中断のやむなきに到った。しかしながら作品完成への執念は強固で緊急入院を前に、自ら、国立音楽大学教授・作曲家トーマス・マイヤー＝フィービヒに補筆完成を託し、2000年10月22日、帰天した。

2002年補筆完成。600名の大合唱による名曲「水のいのち」管弦楽編曲版初演をはじめ、管弦楽曲、オルガン曲、合唱曲、宗教曲で構成された、愛・地球博パートナーシップ事業・高田三郎作品による「ひたすらないのち愛知演奏会」において小松一彦指揮・南山大学管弦楽団により初演(2005年9月・名古屋)された。